東アフリカ沖・ザンジバル

淡路製タイル発見

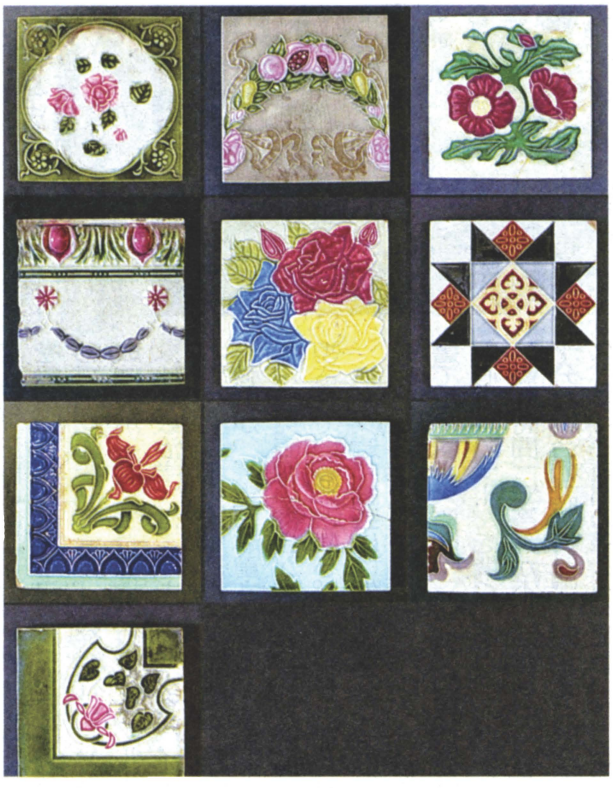
アフリカと貿易か

日本製の「マジョリカ」10枚

大正後期

東アフリカ沖のインド洋にあるザンジバルで、長崎大多文化社会学部の増田研准教授（社会人類学）が、淡路島など日本製の美しい「マジョリカタイル」を見つけた。大正後半ごろに生産されたものとみられる。マジョリカタイルは大正から昭和初期にかけ、中国、東南アジアを中心に日本から大量に輸出されたが、アフリカまで広がっていた可能性が高まったという。

マジョリカタイルは「和製ビクトリアンタイル」とも呼ばれ、当初は英国風のタイルを模したものだった。日本製マジョリカタイルは1908（明治41）年、淡路島の淡陶（現ダントーホールディングス）、不二見タイル社（愛知県）がほぼ同時に英国同様の「乾式製法」のタイル生産を始め、大正、昭和期には生産量の7、8割を輸出に充て、英国風に加え、輸出先の好みに合わせた文様、更に特注品など多様な品が生産された。



増田准教授がザンジバルで入手した日本製のマジョリカタイル。上段左側が「淡陶」のタイル
＝増田准教授提供

ザンジバルは古くからインド洋交易で栄えた地。現在はタンザニアの一部となっているが、元々は大陸とは別の国だった。

増田准教授は、ザンジバルと日本の物質的交流の可能性があるものとしてタイルに着目し、3回目のザンジバル訪問となった今年9月、旧市街で世界遺産になっている「ストーンタウン」の骨董店で10枚のマジョリカタイルを見つけ購入した。10枚のタイルは150～154㍉四方。1枚は裏面中央に「DK」、下に「DANTO KAISHA JAPAN」の刻印があり、淡陶の製品であることが分かった。このほかのタイルでは、愛知県の佐治タイルや不二見タイル社の刻印が確認された。骨董店がこれらのタイルをいつ入手したかは不明だが、入手先は東アフリカとインドらしい。多くが内装や家具などに使われていたものという。

淡路島でタイルについて発掘調査を行ったこともある県立考古博物館の深井明比古学芸員は「国内で現在、マジョリカタイルは生産されておらず、生産していた会社も既になくなっているところが多いため、資料に乏しい。古い記録で『輸出はアフリカにも』との記述はあったが、どこで、どのようなものが使われたかは分かっていなかっただけに貴重な発見だ」と話す。またダントーの清水康弘・淡路島工場長は「戦後までマジョリカタイルは作っていたが、タイルはシンプルなものが主流となり生産されなくなった。社内では現物は残っているが、詳しい記録は残っていない」としている。

増田准教授は「ザンジバルには20世紀前半、多くの日本の船舶が神戸からヨーロッパに向かう途中に立ち寄っていた。大衆音楽で大正琴の人気が高かったなど他にも日本の影響がみられ、ザンジバルと日本の関係を更に調べたい」と話している。

【姫野聡】

毎日新聞（兵庫県版）
2017年11月6日